

# 薬草だより

## 生薬原料平均価格は2006年以降、 上昇を続けています。

樋口 剛央\*

近年、懸案となっている中国産原料生薬の上昇状況を把握するために、日本漢方生薬製剤協会（以下、日漢協）によって2011年、2014年の2回にわたり、価格指数による年度間の比較調査が実施され、生薬価格上昇の実態が報告されました。

**調査実施主体：**日漢協

**調査対象：**日漢協会員会社（会員会社は当社ほか漢方・生薬製剤の製造・販売会社、生薬関連会社）第1回調査74社、第2回調査72社

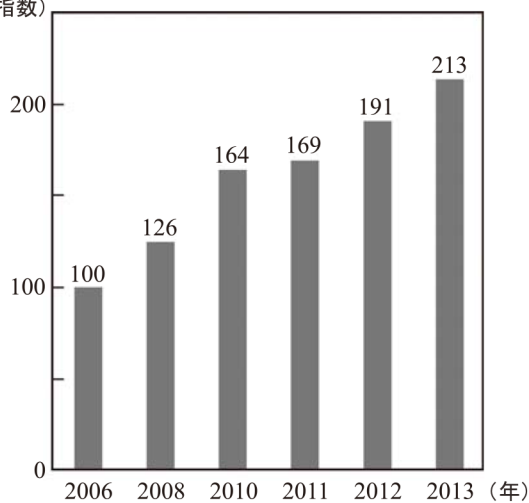
**調査生薬条件：**中国から直接輸入している以下の生薬

- ・2008年度原料生薬使用量等調査（2011年日漢協調査）で使用量上位30位までの中国産生薬であること
- ・その他、価格高騰が著しいと思われる中国産生薬であること

**調査方法：**2006年の生薬購入価格（輸入経費も含む加重平均価格）を100とし、それを基に2008年および2010～2013年の生薬購入価格を価格指数に換算する。

### 調査結果

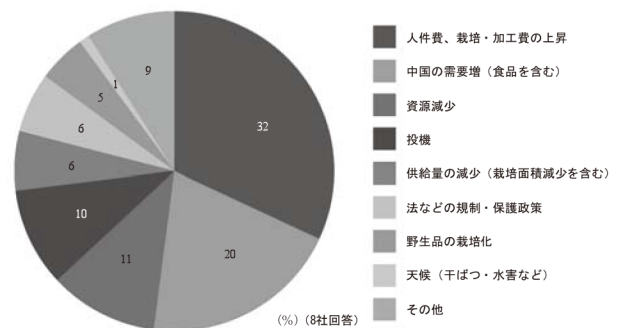
（価格指数）



生薬価格の上昇変動は2000年頃から微小な兆候はありました。しかし、当初は天候不順等による不確定要素が原因とされ、年

が改まれば価格は元の水準に戻るものと楽観視されておりました。しかし、以降数年は微増するに留まっていたが、2006年になると中国国内の経済的構造の変動も加わり、生薬価格の上昇が一挙に顕著になりました。当時、各社事情により原料価格は公開が困難な要素であったため、各社共同で一致した具体的な対応が出来ずに憂慮していましたが、2013年になると原料価格の上昇がいよいよ医療用医薬品の公定価格（薬価）へも大きな影響を及ぼすようになってきました。このため、業界全体で科学的な調査結果に基づく対策の必要性が論じられ、2011年に第1回調査が行われ、2014年の第2回調査と併せて「2006年以降7年間で約2.1倍に上昇」という結果が明らかとなりました。調査対象30品目全てで価格指数が上昇しており、中でも変動が最も大きかったニンジンでは約4倍と著しく高騰しており、キキョウ、オウギ、ダイオウ、ヨクイニンが約3倍でそれに続きました。なお、本情報は「原料生薬使用量等調査結果」（会員会社を対象とした医薬品に使用する生薬の使用量および産出国の調査結果）と共に、厚生労働省による薬価基準改定の参考情報の1つとして活用されました。

次に、価格上昇の原因として各社が挙げた要因（複数回答）は多数ありましたが、とくに多かった二大要因は「中国国内の人件費、それに伴う栽培・加工費の上昇」、「中国国内の生薬需要量の増加」で、この二つで全体の約半数を占めました。これらの要因は現在も継続中であり、日本で流通する中国産原料生薬は、全体的に行き着く先の見えない上昇の一途を辿っていると推測されます。



当社は対策としまして、重要な原料につきましては、可能な限り余剰の在庫を保持することにより、価格への影響を最小限に抑制し、価格安定に努めています。